外国人のイメージ
－日本のマスメディアにおけるイラン人を事例に－
Images of the Alien : A Case of Iranians in Japanese Mass Media

倉　真一

本稿は、１９９０年代に入って日本社会に登場した新たな「外国人」であるイラン人が、日本のマスメディアのなかでどのような＜異質な他者＞として描かれイメージされたのかを、主に大衆雑誌の記事を対象に考察したものである。分析枠組としては、１９８０年代のマスメディアにおける外国人イメージを考察した奥村による先行研究の枠組を援用した。またイラン人イメージの変遷を、三つの時期区分を行って分析した。分析の結果、大衆雑誌のなかに現れたイラン人イメージは、第Ｉ期においては、多様なイメージおよび異質性への対処の技法への方向性をもつものであった。なかでも「消費」「商品化」という、新たな対処の技法への方向性が析出された。第Ⅱ期以降では、主に「排除」という異質性への対処の技法とイラン人イメージの変遷に焦点を当てて分析を行った。そこではイラン人イメージの「悪化」が、「排除」という技法の孕まざるをえない「コワイ」イメージと「排除」の悪循環によって生じたことが明らかになった。

キーワード：イラン人、マスメディア、外国人のイメージ、異質性への対処の技法

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　本稿の分析枠組
Ⅲ　雑誌記事におけるイラン人イメージとその変遷
（1）　第Ⅰ期　１９９０年～１９９２年５月
（2）　第Ⅱ期　１９９２年６月～１９９３年８月
（3）　第Ⅲ期　１９９３年９月～現在
Ⅳ　結語と課題

Ⅰ　はじめに

本稿では、1990年代に入って日本社会に登場した新たな「外国人」であるイラン人が、日本のマスメディアのなかで、どのような＜異質な他者＞として描かれイメージされたのかを、主に大衆雑

誌を題材に検証したいと思う。具体的には、①まず雑誌記事のなかから幾つかの典型的なイラン人イメージを取り出すとともに、後で述べる分析枠組にそって位置づけること、②そのうえで、特に日本におけるイラン人に対して日本社会が行ったと思われる「排除」という対処と、イラン人イメージの変化との関連について明らかにしたい。

Ⅱ　本稿の分析枠組

本稿と同様、マスメディアのなかに現れた「外国人」イメージを分析した研究として、町村らによる1980年代のマスメディアを対象とした研究がある［町村，1990］。そのなかでも特に、＜異質な他者＞のイメージと異質性への対処の「技法」に関する奥村の分析は、ある特定の外国人（主に留学生・就学生と外国人女性労働者）に関する新聞・雑誌記事のみを対象にしながら、汎用性の高い分析枠組の構築にも成功している。ゆえに本稿の目的にとっても有効であると思われるので、基本的な分析枠組としてこれを援用することにしたい。なお以下の分析枠組に関する説明は、特に断らない限り、［奥村,1998：ch.3］を要約、引用したものである(1)。

まず異質な他者に対する「原点」としてのイメージは、「コワイ」である。このいわば彼らが「どのような人か」というイメージが持てない状況で、なおつくりだされるイメージの段階から、やがて「どのような人か」という内容を含むイメージが形成されることになる。その時、直接的な出会い以上に決定的な役割を果たすのが、マスメディアのつくるイメージである。

私達は世界の大部分を直接体験するわけでなく、何らかの「文化装置」（cultural apparatus）を通して間接的に経験する。「文化装置」とはミルズ（Mills,C.W.）によれば、「人々がそれを通してみる人類のレンズ」であり［Mills,1963=1971:323］、それによって私達は直面する同じ世界を、まったく異なるように解釈し感じるようになる［奥村,1997:302-303］。マスメディアはそのような「文化装置」のひとつであり、世界を解釈する際の「枠組」と枠組を通じて選択、解釈、強調、構築された「イメージ」を提供している。

異質な他者に対処するときにも、やはりメディアから受けとるイメージが（修正や読替もされながら）活用されることになる。奥村は外国人ニューカマーへの対応を迫られた1980年代の日本の新聞、雑誌のなかの外国人イメージを分析して、「カワイソウ」イメージ、「キタナイ」イメージ、「ケナゲ」イメージ、さらに「タクマシイ」「ガメツイ」「ズルイ」イメージを析出する。これらのイメージは外国人という他者を解釈する枠組を通じて現れるが、枠組は以下の二つの軸により構成されており、二軸による座標平面上に外国人イメージおよび異質な他者への対処の「技法」を位置づけることができる。

第一の軸は、他者が「主体」（能動的な「人」）か、「客体」（受動的な「もの」）として登場するかを表すもので、第二の軸は、そのイメージが「ポジティブ」（肯定的・好意的）か、「ネガ

ティブ」（否定的・非友好的）かを示す。この二軸をクロスさせると、四つの象限ができる。奥村はまず第一象限を「主体×ネガティブ」とし、続いて第二象限を「客体×ネガティブ」、第三象限を「客体×ポジティブ」、第四象限を「主体×ポジティブ」とする。そのうえで先の外国人イメージ群を座標平面上に位置づけてみると、第一象限（主体×ネガティブ）には、「ガメツイ」「ズルイ」イメージおよび「コワイ」イメージが、第二象限（客体×ネガティブ）には、「キタナイ」イメージが、第三象限（客体×ポジティブ）には、「カワイソウ」イメージが、第四象限（主体×ポジティブ）には「ケナゲ」および「タクマシイ」イメージが位置づけられる。

さらにそれぞれの象限において、第一の軸（主体－客体）の主体あるいは客体の度合いが高まれば、第二の軸（ポジティブ－ネガティブ）でもイメージがよりポジティブあるいはネガティブになる傾向があり、各象限に固有の異質な他者への対処の「技法」へより強く方向づけられることになる。つまり第一象限においては、他者が主体の度合を高めるとイメージはいっそうネガティブになり（「ガメツイ」→「ズルイ」→「コワイ」）、そこから「排除」という技法へ方向づけられることになる。同様に第二象限では他者が「キタナイ」もの＝客体としての度合を強めるとイメージはよりネガティブになり、「差別」という技法にいっそう方向づけられ、第三象限では他者が「カワイソウ」な客体になればなるほど、イメージはポジティブになり、「同情」や「援助」といった技法に方向づけられることになる[(2)]。

しかし残りの第四象限だけは、他者がより主体の度合を強めれば、イメージがよりポジティブになるという傾向は、少なくともマスメディアのなかには見いだせないと奥村はいう。なぜなら、第四象限では主体の度合いの弱い「ケナゲ」イメージとより強い「タクマシイ」イメージが位置するが、そこからさらに主体の度合が強くなると、イメージは第一象限の「ガメツイ」「ズルイ」イメージにいってしまい、逆に主体の度合いがより弱くなると第三象限の「カワイソウ」イメージになってしまうのだ。

ここで第一象限にも第三象限にも行かずに、第四象限にとどまる対処の技法として、「異質」な他者を「同質」な他者＝「私たち」のひとりに転換して、その「主体」と「ポジティブ」につきあう技法を想定してみる。これは、「同質化」あるいは（奥村はこの言葉は用いていないが）「同化」という普通にみられる技法でもあるが、「同質化」「同化」という技法は、もはや異質性に対処する技法とはいえない。やはり他者の異質性を保持したままで、第四象限にどどまる対処の技法は、マスメディアのなかの外国人イメージからは見いだせない[(3)]。

以上が、異質な他者のイメージと異質性への対処の技法に関する、奥村の分析枠組の概要である。本稿におけるイラン人イメージの分析に際しても、基本的にこの枠組を用いるが、ひとつだけ簡単な補足を行っておきたい。それは異質な他者に対する「原点」としてのイメージに関するものである。奥村はそれを「コワイ」イメージとしているが、異質な他者の原初的なイメージとしては「コワイ」といったネガティブなイメージばかりでなく、ポジティブなイメージもあるように思われる（例えば、異質なものへの好奇心に由来するようなイメージ）。以下で詳しく論じるが、異質な他者のイメー

ジの両義性を考慮したうえで、イラン人イメージの分析を行いたい。

Ⅲ　雑誌記事におけるイラン人イメージとその変遷

ここでは日本におけるイラン人が、マスメディア（本稿の分析対象としては、大衆雑誌に限定されるが）のなかで、どのような枠組によって解釈され、またどのような「外国人」として描き出されていたのか分析してみたい。

分析の対象となった雑誌記事は、大宅壮一文庫が収集している大衆雑誌に掲載されたものであり、そのなかから日本に滞在するイラン人に関する雑誌記事を検索するため、同文庫が編集している『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』のＣＤ－ＲＯＭ版（1988～1999年）を用いて見出し検索を行った。検索語は「イラン人」とし、出力された検索結果のうち、明らかに日本以外のイラン人に関すると思われる記事は分析対象より除外した。その結果、今回の分析対象となった1990年以降の各年における雑誌記事数は、以下の表１のとおりである。なお表１には記事総数のほかに、特に何らかの非合法性を示す語彙（例：不法就労、不法滞在など）や何らかの犯罪行為を示す語彙（例：麻薬、偽造テレホンカード、密売など）を見出しに含んだ記事を「非合法関連記事」とし、その記事数をカウントしている。また「非合法関連記事」の記事総数に占める割合を、各年ごとに算出している（表１）。

表１　在日イラン人関連の雑誌記事数の推移

年	イラン人関連雑誌記事総数(A)	「非合法関連」記事数(B)	(B)の(A)に占める割合(%)
1990年	2	0	0.0
1991年	12	2	16.7
1992年	36	7	19.4
1993年	39	21	53.8
1994年	21	10	47.6
1995年	4	1	25.0
1996年	19	16	84.2
1997年	10	2	20.0
1998年	3	1	33.3
1999年	3	1	33.3

（資料）［大宅壮一文庫，2000］より筆者作成。

以下では大衆雑誌におけるイラン人関連記事を、三つの時期に分けて分析したい。三つの時期は、彼らイラン人にとって重要な意味を持った二つの「事件」、すなわち1992年４月のビザ相互免除協定の停止＝事実上の新規入国の禁止と1993年夏の代々木公園の「リトル・テヘラン」の閉鎖＝公的空間からの排除、によって画される。以上のような時期区分を行う訳は、単なる便宜上の理由ではなく、後述するように雑誌記事におけるイラン人イメージの変遷と時期区分がよく一致するからである。

まずここで三つの時期区分を明確にしておこう。最初の第Ⅰ期は、来日するイラン人が増加を始めてから、1992年４月のビザの相互免除協定の停止によって新たな来日が激減し、日本におけるイラン人の数がピークから減少に転じるまでの、1990年～1992年５月までの時期になる。続く第Ⅱ期は1992年６月～1993年８月までで、日本におけるイラン人最大の「たまり場」であった代々木公園の「リトル・テヘラン」が最終的に閉鎖され、「公園」などの公的空間から排除されるに至るまでの時期である。第Ⅲ期は1993年９月～現在に至る時期である。

（1）　第Ⅰ期　1990年～1992年５月

イラン人が日本の大衆雑誌の登場するようになるのは、彼らが日本で増加を始めた時期とほぼ一致する。1990年末には既に代々木公園のイラン人の集まりが「リトル・テヘラン」として紹介されている（『週刊宝石』1990.12.13,『週刊朝日』1990.12.14）。この最初期のイラン人のとり上げられ方は、まずは国際都市トウキョウの真ん中に突然出現した＜異質な他者＞の集団に対する驚きであった。また「イラン人大集合の珍現象」（『週刊宝石』1990.12.13）、「代々木公園の異様」（『週刊朝日』1990.12.14）、「リトル・テヘランの異様」（『週刊文春』1991.6.27）という見出し記事がすべてグラビアであったことは、この驚きが彼らの公的空間における圧倒的な「可視性」にあったことを示している［町村,1999:193］。

この驚きのなか、如何なるイラン人イメージが生起していたのだろうか。異質な他者に対する原初的なイメージとして、まず考えられるものは「不安」や「恐怖」あるいは「不気味さ」であろう。雑誌記事の見出しにある「異様」という形容詞が、この原初的イメージをよく表している。クリステヴァ（Kristeva,J.）によれば、「不安を呼ぶものとしての異者」とは、そもそも「我々自身のなかに内在するもの」に他ならない。すなわち「自己愛的自我は、自分の中で危険、不快と感じるものを外に追いやる。それらを異様、不安、恐怖という分身に仕立てる」のであり、この自分自身の無意識が投射された「分身」こそが他者なのである［Kristeva,1988=1990:221-224］。

また日本の民俗社会における「異人殺しのフォークロア」を分析した小松は、それが「異人」に対する潜在的な恐怖心とともに、排除の思想によって支えられていると指摘する［小松,1985:86］。「異人」に対する恐怖心は、差別や排除と結びつく可能性に開かれてもいるのである。

「不安」「恐怖」「不気味さ」を呼ぶものというイメージとは別に、新たに出現した異質な他者は「もの珍しさ」や「好奇心」を呼ぶものでもある。例えば、「イラン人大集合の珍現象」（『週刊宝石』1990.12.13）や「今話題！」（『FRIDAY』1991.7.5）といった見出しには、この原初的な他者イメージの側面が表れている。否定的なイメージである前者に対して、後者は肯定的なイメージといえるだろう。このような異質な他者に対する正反対の原初的イメージの共存は、民俗学や文化人類学における異人の両義性として議論されてきたものである(4)。異人は共同体に「災厄」をもたらすとして時に忌避（差別）され虐待（排除）されもするが、共同体に新たな意味や価値、「富」をもたらすとして時に歓待される存在でもあったのだ。

さらに異質な他者が帯びる両義性は、社会学的には意味の安定性を求めると同時に、意味の新奇性をも求める人間存在の両義性に拠っているとも解釈できる［森下ほか,1998:95-96］。意味の安定性を求める点からすると、新たな異質な他者の出現は、一時的にせよ世界や自己の意味づけを混乱させる。意味が不安定な状態とは、「何が起こるかわからない」状態＝「不安」を呼び起こす状況である。この不安が異質な他者に向けられるなら、他者は「何をするかわからない」＝「コワイ」ものとしてイメージされることになる。一方で新奇性を求める点からすると、新たな異質な他者の出現は、世界や自己の意味づけを不安定にしつつも（あるいは不安定にすることで）、新しい意味、

新しい意味づけをもたらす存在でもある。この場合、安定した意味の世界の退屈や停滞に風穴を開けるものとして、異質な他者は肯定的にイメージされることになる。

原初的なイメージとしての「不安」であろうが、「好奇」であろうが、人や社会は異質な他者を自分で理解可能な枠組を持ち出したり、あるいは新たな枠組を生み出したりして解釈しようとする。そのような枠組によって、不安定だった世界と私は安定した意味づけを取り戻し（よって安心がもたらされる）、あるいは従来の秩序に対する「新奇」さも、新たな意味的秩序のなかに取り込まれていくことになる。

イラン人の場合、最初に現れた解釈の枠組は、以下の一連の雑誌記事のなかに見いだせる。彼らは「出稼ぎイラン人のあゝ上野駅」（『AERA』1991.6.25）、「上野公園に群れる「出稼ぎ」イラン人」（『FLASH』1991.7.9）、「出稼ぎイラン人に主役が変わった「原宿ホコ天」」（『FOCUS』1991.10.25）といった見出しのなかで、まずは「出稼ぎ労働者」として解釈されイメージされる。雑誌記事のなかのイラン人は、ときに過去の東北地方からの出稼ぎ労働者や出稼ぎを象徴する上野公園や上野駅といった場所の記憶と結びつけられ語られる。まずは既知の枠組、すなわち「出稼ぎ」の物語がイラン人に当てはめられたのだ。出稼ぎ物語のなかの苦労や貧困といったイメージも、同時にイラン人に重ね合わされる。単身来日してから比較的間もなく、不況の深刻化で仕事も家も見つかっていない者も多かったことから、特に上野公園のイラン人は、「野宿するイラン人に厳しすぎる「日本の冬」」（『FRIDAY』1991.12.20）、「「追い出し作戦」で寒さ身にしむイラン人野宿者」（『アサヒグラフ』1991.12.20）といったように、ホームレス化した失業者として、同情の対象（「カワイソウ」な外国人）としてもイメージされている。これは異質な他者のイメージに関する座標平面でいえば、第三象限＝客体×ポジティブな他者イメージに該当するものである。

この「出稼ぎ労働者」としてのイラン人イメージは、1991年頃までは前面に出ていたが、1992年４月と５月の二つの記事を最後に見出しのなかから消えてしまう（『宝島』1992.4.24,『DIME』1992.5.7）。それに変わるように1992年になって現れたのが、「不法就労」「不法滞在」といった「非合法」な存在としてのイラン人イメージである。その最初の例は1992年２月の記事であり、そこで初めて「イラン人不法就労問題」（『週刊プレイボーイ』1992.2.18）という表現がでてくる。続いて４月にも、「“不法”イラン人の追放作戦で消える！？　代々木公園のリトル・テヘランの春」（『アサヒグラフ』1992.4.17）という記事が見られる。

上の二つの記事は、必ずしもイラン人に対し否定的なスタンスをとっている訳ではなく、「不法」という記号は単に出入国管理法への違反という意味か、あるいはむしろ同情的な文脈で用いられている。にもかかわらず「不法」という表現が用いられたのは、この頃にはイラン人を「非合法」な存在としてみる視線、まなざしが一般化しはじめていたからであろう。既に述べたように1992年４月にはイラン人の日本への流入を止めるためビザの相互免除協定が停止されるが、その政策判断を支えたのは間違いなく彼らに向けられたこの種の視線であった。その後、国内に残ったイラン人への取り締まりが強化されるが、このことは「非合法」な存在の排除に向かうようなまなざしを強化

することに繋がっていった。

表２　第Ⅰ期（1990年～1992年５月）におけるイラン人関連雑誌記事一覧

1990.	12. 13	＜グラビア＞　歩行者天国の「リトル・テヘラン」　原宿のホコ天、週末ごとにイラン人大集合の珍現象（『週刊宝石』）
	12. 14	＜グラビア＞　日曜日の午後、続々とイラン人が集まる代々木公園の異様（『週刊朝日』）
1991.	2. 5	イラン人向けホテルは満杯、入管法改定後半年の風景（『ＡＥＲＡ』）
	6. 25	出稼ぎイラン人のあゝ上野駅（『ＡＥＲＡ』）
	6. 27	＜グラビア＞　東京・原宿はイラン人がいっぱい　代々木公園リトル・テヘランの異様（『週刊文春』）
	6. 30	原宿発「リトル・イラン町」の2000人（『毎日グラフ』）
	7. 5	なぜか日曜日ごとに数千人が集まって…　今話題！東京・代々木公園にできた「リトル・テヘラン」（『ＦＲＩＤＡＹ』）
	7. 6	原宿に“リトル・テヘラン”出現！（『週刊時事』）
	7. 9	上野公園に群れる「出稼ぎ」イラン人　集団検挙の現場（『ＦＬＡＳＨ』）
	7. 19	「おじさん、どこの国の人？」「イランお世話だっ？」　毎週日曜日、代々木公園に大集合するイラン人たち（『週刊ポスト』）
	9.	東京都テヘラン市原宿　＊日曜ごとに代々木公園に集まってくる在日イラン人（『潮』）
	10. 25	「竹の子族」から出稼ぎイラン人に主役が変わった「原宿ホコ天」（『ＦＯＣＵＳ』）
	12. 20	深夜の上野公園で大捕物！？　野宿するイラン人に厳しすぎる「日本の冬」（『ＦＲＩＤＡＹ』）
	12. 20	上野の山は、いまや「リトル・テヘラン」「追い出し作戦」で寒さ身にしむイラン人野宿者（『アサヒグラフ』）
1992.	1. 14	イラン人のおいしい水（『ＡＥＲＡ』）
	2. 7	午前３時のイラン人たち　イラン人たちの日本への出稼ぎラッシュ（『朝日ジャーナル』）
	2. 18	イラン人不法就労問題に見える“自国民とも付き合えない日本”（『週刊プレイボーイ』）
	3. 5	金持ち日本に群がるイラン人（『ニューズウイーク』）
	3. 12	イラン人“大増殖”で上野の山は困った困った　このままでは花見もできない！（『週刊文春』）
	4. 2	上野の山でイラン人男性を物色　日本人有閑マダム３万円の「男買い」（『アサヒ芸能』）
	4. 7	サラーム！“辞書オジサン”大忙し出動中　500円の手作り辞書が代々木公園でイラン人にバカ売れ！（『週刊プレイボーイ』）
	4. 10	国際化ニッポンルポ　上野の山に異変あり　イラン人とお花見ダ～イ（『週刊朝日』）
	4. 12	上野の森ルポ　イラン人ｖｓ．日本人「俺たちは花見どころじゃないんだ！　＊上野公園には働き口を探すイラン人が大混雑（『サンデー毎日』）
	4. 16	＜グラビア＞花見のメッカ上野の山でイラン人もベロンベロン（『週刊文春』）
	4. 17	“不法”イラン人の追放作戦で消える！？　代々木公園「リトル・テヘラン」の春（『アサヒグラフ』）
	4. 19	＜グラビア＞ちょっと浮かない上野の花見　＊不況でさえない花見客たち、場所取りを不思議そうに見つめるイラン人たち、他（『週刊読売』）
	4. 23	＜グラビア＞上野の森のイラン式お花見　三十三万人の花見客にまぎれて　日本・イラン混合のドンチャン騒ぎ（『週刊宝石』）
	4. 24	出稼ぎイラン人の生活と意見（『宝島』）
	4. 25	＜グラビア＞イッショニ花見シマセンカ？　舞台は上野公園、日本ｖｓ.イランお花見領土紛争の危機回避（『微笑』）
	4. 26	上野のお山は国際色の“満開”イラン人も一緒に楽しく花の宴（『毎日グラフ』）
	5. 3	＜グラビア＞急増！帰りたくないけど帰るイラン人　＊日本の不景気とビザ免除の停止で自ら強制退去を求めて出頭するイラン人が急増（『週刊読売』）
	5. 5	パチスロ大好き、格闘技大好き、とっても人間臭いぞ！近くて遠い隣人“イラン人”ってどんな人？（『週刊プレイボーイ』）
	5. 7	イラン人がいつも長電話している理由！　＊上野公園周辺のイランからの出稼ぎ労働者（『ＤＩＭＥ』）

（資料）［大宅壮一文庫，2000］より筆者作成。検索語＝イラン人。

イラン人に対する「非合法」の烙印がよりはっきりと押されていくなか、彼らに対する否定的なイメージが雑誌記事に出てくる。「イラン人“大増殖”で上野の山は困った困った　このままでは花見もできない！」（『週刊文春』1992.3.12）は、雑誌記事におけるその最初のケースであるが、

そのなかでイラン人たちは地域社会のトラブル・メーカーであり、トラブルの原因は彼らの「自由奔放、やりたい放題」の振る舞いに帰せられる。また見出しには出て来てはいないが、彼らの「やりたい放題」の一つとして、「スリ、万引き、カツアゲ」などの犯罪行為も挙げられていく。これは主体×ネガティブな他者、すなわち第一象限に該当するイメージである。この第一象限においては、他者が主体であればあるほどイメージはネガティブになる傾向があるが［奥村,1998:117-118］、実際に「自由奔放で、やりたい放題」の主体とされる彼らは、極めてネガティブにイメージされている。さらに彼らは、「臭い。風呂に入らないし着替えをしないからものすごく臭う」ので、映画館では消臭剤を足にかけられもする。ここではイラン人は「不潔」で「臭い」、すなわち「キタナイ」「クサイ」ものとしてイメージされており、これは客体×ネガティブな他者＝第二象限に該当するものだろう。このように記事のなかでは、「排除」や「差別」という異質性対処の技法に向かうネガティブなイメージだけが語られていく。そして実際に記事は、「イラン人はもういらん」という排除の言辞で締めくくられることになる。

上野のイラン人については、その後の花見シーズンに入り各誌が競って採り上げるが（『週刊朝日』1992.4.10,『サンデー毎日』1992.4.12,『週刊文春』1992.4.16,『週刊読売』1992.4.19,『週刊宝石』1992.4.23,『微笑』1992.4.25,『毎日グラフ』1992.4.26）、そのなかで実はもう一つ別のイメージも現れてくる。

各誌が一斉にとり上げた理由の一つは、一部の雑誌の見出しにあるような「イラン人ｖｓ日本人」（『週刊読売』1992.4.19,『微笑』1992.4.25）式の対立の図式を、事前にニュースフレームとして想定していたことにあったが、予想に反した事態は（「お花見領土紛争の危機回避」『微笑』1992.4.25）、枠組の修正や変更を迫るものであった。もし変更がなければ、おそらく第一象限の主体×ネガティブな他者としてイメージされていただろう。実際には、変更・修正された枠組は、「コワイ」イメージとは別の、異質な他者へのもう一つの原初的イメージをベースにして組み立てられることになった。

では修正・変更された枠組のなかで、イラン人は如何にイメージされたのか。「イラン人とお花見ダ～イ」（『週刊朝日』1992.4.10），「イラン人もベロンベロン」（『週刊文春』1992.4.16），「日本・イラン混合のドンチャン騒ぎ」（『週刊宝石』1992.4.23），「イッショニ花見シマセンカ？」（『微笑』1992.4.25），「イラン人も一緒に楽しく花の宴」（『毎日グラフ』1992.4.26）といった見出しからは、イラン人は「コマッタ」「コワイ」外国人＝ネガティブな主体から、一緒に花見ができる程にはポジティブにイメージされている。では彼らはポジティブであると同時に、主体としてイメージされているのだろうか。実際には主体としてのイラン人イメージは、巧妙に弱められ回避されているように思われる。

まず「自由奔放、やりたい放題」（『週刊文春』1992.3.12）であり、彼らの「するどい」視線によって「じろじろ見られるので怖い」［山崎ほか,1992］と日本人住民によって語られる時の上野のイラン人イメージは、主体×ネガティブな他者のそれであった。対照的に「イッショニ花見シマ

センカ？」（『微笑』1992.4.25）と言い、「場所取りを不思議そうにみつめる」（『週刊読売』1992.4.19）同じ上野のイラン人たちの物言いと視線の柔らかさは、弱められた主体、無害化された主体のそれである[(5)]。

また主体の度合が弱められているばかりでなく、客体に転じてもいる。見出しのなかの日本人とイラン人との関係を示す部分をみてみると、「イラン人とお花見」「イラン人もベロンベロン」「イラン人も一緒に」という文節が見られるが、これらと結びつく隠れた主語は「日本人」である。主体は日本人であり、客体はイラン人であるという構図が成立しているのがわかる。

さらに一連の記事中の「国際化ニッポンルポ」（『週刊朝日』1992.4.10）、「国際色の“満開”」（『毎日グラフ』1992.4.26）といった見出しは、ニッポンの、あるいはトウキョウの「国際化の風景」の構成要素としてイラン人を捉えるものだろう。この時期の上野のイラン人を取り上げた７件の記事のうち５件がグラビア記事であるのも、文字どおり「国際化の風景」をビジュアルに象徴するものとして取り上げられた結果と思われる。上野の山を「国際色の“満開”」にする限りで、イラン人のイメージはポジティブであるが、それは日本人から見られ愛でられる「風景」（＝客体）としてに過ぎないといえよう。

以上の考察から、上野のイラン人を解釈する枠組のなかでは、主体としてのイメージが弱められ回避され客体化している限りで、イラン人のイメージがポジティブなものとなっており、客体×ポジティブな他者イメージ＝第三象限に位置づけられる。「国際化の風景」としてのイラン人は、主体として弱められ客体に転換されたうえで、「もの珍しさ」「好奇心」を呼ぶものとして、いわば「メズラシイ」「カワッテル」イメージによって、主体としての日本人にポジティブな形で“享受”されているのである。同じ第三象限に位置しながら、「同情」とは異なる技法が考えられそうだ。もしこの享受が消費社会の商品市場における“購入”という形をとれば、「消費」あるいは「商品化」といった異質性対処の技法がありうる。

第Ⅱ期の雑誌記事になるが、「法務省がついに代々木公園を＜イラン人保護区＞に指定！」（『ＳＰＡ！』1993.5.12）は、「消費」「商品化」という技法の本質を衝いた一種のパロディ記事になっている。パロディ記事中では代々木公園の「リトル・テヘラン」は、「イラン人保護区兼人間サファリパーク」になっており、「はとバスツアーも来る」観光名所である。そしてガイドは「では異文化との触れ合いを心ゆくまでお楽しみください。インシュアラー！」と流暢な日本語で客にいうのだ。だが異質な他者を主体としてでなく、商品化＝客体化して対処（＝消費）する技法は、今日では極めて日常的なものである。日本各地にある「異文化テーマパーク」やエスニック料理のブームなどはそのよい例だろう。

ここで第Ⅰ期に現れた複数のイラン人イメージについて、まとめてみよう。まず大衆雑誌において、最初期には異質な他者に対する二つの原初的イメージ（「不安」と「好奇」）が共に現れていた。その後でてきたイメージは、第一に「出稼ぎ労働者」としての「カワイソウ」イメージで、イラン人が第三象限の客体×ポジティブな他者としてイメージされており、そこからは「同情」という異

質性対処の技法が出てくるだろう。第二に、「不法就労」「不法滞在」といった「非合法」イメージが出てくる。このイメージは当初、雑誌記事のなかでは単に法的に滞在・就労が非合法な存在という意味しかなかった。その意味では主体とも客体とも、ポジティブともネガティブともいえない（見方を変えれば、どちらにもなりえる）イメージである。そこからイラン人が主体としてネガティブなイメージを帯びるようになるのが先述の『週刊文春』の記事で、第三の「コマッタ」「コワイ」イラン人イメージが全面に出てくる。これは異質な他者に対する原初的イメージ（「不安」）が、より具体的な内容をもったものだ。ここではイラン人は第一象限の主体×ネガティブな他者とイメージされ、「排除」という技法への方向が出てくる。同記事中では、第四の「キタナイ」「クサイ」イメージ、すなわち第二象限の客体×ネガティブな他者イメージと「差別」という技法への方向も傍流ではあるが存在していた。またもうひとつの異質な他者への原初的イメージである好奇は、雑誌記事のなかでは「国際化の風景」としてのイラン人イメージという形で具体的には現れた。それは客体×ポジティブな他者のイメージであるが、同じ第三象限から出てくる「同情」という技法とは別の、「消費」「商品化」という異質性に対処する技法への方向性を持つ。

最後に「同質化」「同化」という技法に向かう可能性のあるイラン人イメージとして、第Ｉ期の最後に出てくる『週刊プレイボーイ』の記事を挙げてきたい（『週刊プレイボーイ』1992.5.5）。この記事の見出しでは、「近くて遠い隣人“イラン人”ってどんな人？」という問いに、「パチスロ大好き、格闘技大好き、とっても人間臭いぞ！」という答えがかえってくる。記事のなかのイラン人は、日本人とも同質な「とっても人間臭い」存在としてイメージされている。

以上のように第Ｉ期は、様々なイラン人イメージが大衆雑誌のなかで現れた時期といえる。それらのイメージは、同時にイラン人という新たな異質な他者に対する「同情」、「排除」、「差別」、「同質化（同化）」および本稿の分析で新たに見出された「消費（商品化）」という複数の対処の技法へ方向づけられるものだった。そのうち続く第Ⅱ、第Ⅲ期において、異質性対処の技法として実際に行われたのは、特に「排除」であったといえる。もちろん他の対処の技法がなかった訳ではないが、以下の分析では「排除」への方向性を持つ「コワイ」イメージの変化と、「排除」という異質性に対処する技法がどのように結びつくのか考察することにしよう。

（２）第Ⅱ期　1992年６月～1993年８月

第Ⅱ期では、第Ｉ期に出てきたイラン人イメージのうち、「非合法」イメージと「コマッタ」「コワイ」イメージの両方が結びつくなか、ビザ相互免除協定の停止に至る「排除」が行われ、「犯罪者」としてのイラン人イメージがはっきりと姿を現す。第Ｉ期の『週刊文春』（1992.3.12）においては、見出しに出てこなかったイラン人の犯罪が直接出てくるようになる。

表３　第Ⅱ期（1992年６月～1993年８月）におけるイラン人関連雑誌記事一覧

1992.	6. 18	コロンビア麻薬カルテル日本に侵攻中　運び屋はイラン人と共にやってくる（『週刊文春』）
	7. 30	大物イラン人歌手来日で見えた“情報”の落とし穴（『ＣＲＥＡ』）
	8. 12	＜インタビュー＞上野のイラン人　お金ない、疲れてる。アラーの神にも祈れない。日本人の心、少し寂しい　＊偽造テレカの売買など（『ＶＩＥＷＳ』）
	9.	イランのバザールが出現　＊上野の西郷銅像下周辺（『東京人』）
	9. 8	アラーもたまげた！？浦安の東京ベイＮ・にホールに在日イラン人3000人集結の怪！　＊イランの国民的歌手モインのコンサート（『週刊プレイボーイ』）
	9. 11	東京発大垣行き　ビンボー列車若者からオバさん、イラン人にまで超人気　＊夜行列車
	10. 6	在日イラン人に今何故か「江ノ島バカンス」が大流行　黄金週間の頃、２人の同胞が海水浴に訪れたのがきっかけでステイタスと化して（『ＦＬＡＳＨ』）
	10. 5	ロイド、研ナオコ、謎のイラン人が付き人に！マジトさん　日本語のべらべら、将来は「トーク番組の司会を」というタレントの卵（『女性セブン』）
	11. 3	新宿２丁目の新人ゲイ通りにイラン人が現れ始めた（『ＡＥＲＡ』）
	11. 10	東京のリトル・テヘラン　堂々麻薬密売のイラン・マフィア　原宿・代々木公園はアヘンや大麻、変造電話カードが取り引きされる（『ＡＥＲＡ』）
	11. 25	うれしい誤算で意外な場所に人だかり　暴走族のメッカ、江ノ島　イラン人リゾートになって観光収入がアップした！？（『ＳＰＡ！』）
	12.	訪日イラン人に暖かい声一つかけられない日本人「国際化」いまだし（『ＤＥＣＩＤＥ』）
	12. 6	上野から新宿へ　イラン人大移動の？（『サンデー毎日』）
	12. 22	代々木公園でみつけた亡命イラン人の「抵抗歌」（『ＡＥＲＡ』）
1993.	2. 2	イラン人、ヒロシマへ行く。日本に来てまず行ってみたかった都市…広島。彼らにとっての“広島体験”とは…！？（『週刊プレイボーイ』）
	2. 25	ナント暴力団員に夜の新宿で“一人歩き禁止令”　＊イラン人、コロンビア人マフィアにねらわれる暴力団員（『週刊宝石』）
	3. 3	イラン人タレント、ハミッド・シャイエステ氏が語る　来日イラン人の本音（『ＳＰＡ！』）
	3. 28	トンカツは“いらん”に仰天　大阪府警の「イスラム」体験　＊大阪城公園で不法滞在イラン人の集中摘発（『週刊読売』）
	4. 6	在日イラン人達の光と陰　カオスの代々木公園潜入ルポ　恐喝事件の真相から、偽テレカ、3000円麻薬の現状まで（『週刊プレイボーイ』）
	4. 10	青空の下で本場バーベキュー　＊原宿イラン村の屋台（『週刊現代』）
	4. 13	イラン料理店の店主らが外国人救済のための互助会結成「国が動かないなら私たちがやります！」（『週刊プレイボーイ』）
	4. 24	代々木、新宿、上野・噂のイラン人スポットに潜入！！　ドラッグまで売られていた！！イラン人マーケットの実態（『宝島』）
	4. 25	＜グラビア＞　潜入ルポ　日本人が近寄れない　代々木公園の“リトル・テヘラン”（『週刊読売』）
	4. 28	ガイジンが狙っている　日本のアキレス腱　イラン人が実感した日本人の優越意識　＊外国人労働者に対する差別（『ＶＩＥＷ』）
	5.	＜グラビア＞警視庁が公安予算獲得で在日外国人対策を強化へ　日曜日の代々木公園はイラン人と公安の睨み合い（『噂の真相』）
	5. 6	イラン人理髪　代々木公園で国際親善。（『自由時間』）
	5. 12	法務省がついに代々木公園を＜イラン人保護区＞に指定！（『ＳＰＡ！』）
	5. 27	大座談会　不法滞在イラン人にも言わせろ　「代々木公園締め出しはネオ・ナチと同じだ」（『週刊文春』）
	5. 28	102人摘発　代々木公園「史上最大のイラン人狩り」現場撮った！（『ＦＲＩＤＡＹ』）
	5. 29	リトル・テヘラン　代々木公園を“閉め出された”イラン人の行方（『週刊時事』）
	5. 30	＜グラビア＞　「なぜボク達だけが…」締め出されたイラン人の行方を追う（『サンデー毎日』）
	6. 1	日曜日の代々木公園で、まるで掃除感覚の大規模“不法滞在者狩り”イラン人を日本からポイ捨てしていいのか！？（『週刊プレイボーイ』）
	6. 4	イラン民族大移動東京縦断北上中　目標は池袋か大宮か　上野、代々木公園を追われた新たな情報交換地を探す砂漠の民（『週刊朝日』）
	7.	そして「彼ら」は去っていく　ＴＯＫＹＯイラン人地帯（『現代』）
	7.	警視庁公安部の「イラン人逮捕」でっち上げの無謀さを衝く　＊２月５日イラン人２名を恐喝容疑で逮捕（『噂の真相』）
	7. 15	＜インタビュー＞マジド・ジャイエステ“日本で最も幸せなイラン人”になるための必須条件（『自由時間』）
	7. 20	イラン人ジャバドの賃金闘争100日！彼が未払い賃金50万円の内30万円を取り戻すまで…（『週刊プレイボーイ』）
	8. 26	＜グラビア＞　原宿の「イラン戦争」（『週刊新潮』）
	8. 27	３ヶ月ぶり開放の直後に　イラン人ｖｓロッカー「代々木公園の大乱闘」（『ＦＲＩＤＡＹ』）

（資料）［大宅壮一文庫，2000］より筆者作成。検索語＝イラン人。
（注）表からは個別の刑事事件報道は除外した。除外した件数は、92年３件（原宿スタイリスト殺人３件）、93年５件（原宿スタイリスト殺人１件，ローマ・女子大生レイプ事件４件）。

雑誌記事ではないが、イラン人が犯罪と結びつけられてイメージされた現象として、1992年５月～７月にかけて、東京都西部のＪＲ中央線沿線で流布したイラン人が主婦を襲うとのデマがある。これを含めた三次にわたる外国人「レイプ魔」のデマを分析した三隅によれば、デマの流布した社会的要因として、中核的なデマの担い手であった中高年主婦層の生活防衛意識と、その生活防衛意識が敵（「平穏な家庭や地域社会を乱す者」）として見いだしてしまう「異人」への蔑視があったという。外国人はその敵意を含んだ蔑視の対象としては、単なる余所者としての外国人でも、具体的な生身の外国人でもなく、「金目当ての出稼ぎ」「浅黒い」「汚い身なり」といった“穢れ者”であり、「不法就労者」「不法滞在者」「地域のルール破り」という“無法者”であり、「独身者」「カタコト」「無職」の“半端者”といった、抽象的な畏怖感としての異人であった［三隅,1993］。

異人性を構成したこれらの抽象的なイメージ群は、第Ｉ期にイラン人に向けられたそれとよく一致する。なかでもイラン人に対する“無法者”というイメージは、「非合法」の存在としてのイラン人イメージ（「不法就労者」「不法滞在者」）と「コマッタ」「コワイ」イメージ（「地域のルール破り」）の両方から構成されている。そしてデマの流布した時期が４月のビザ相互免除協定停止の直後であったのは、おそらく単なる偶然ではなく、協定停止の前後にイラン人の摘発が活発に行われるなど、「非合法」の烙印が日本社会からの「排除」の動きを伴いながらより強く捺された結果と推測される。

イラン人の犯罪を直接とり上げた雑誌記事が出てくるのは、イラン人犯罪のデマが続いていた最中の1992年６月のことであった（「コロンビア麻薬カルテル日本に侵攻中　運び屋はイラン人と共にやってくる」『週刊文春』1992.6.18）。その後1992年末から1993年にかけて、イラン人犯罪記事の数は激増する。先掲の表１をみると、1992年に36件中７件に過ぎなかった「非合法関連」の記事は、翌93年には39件中21件とその数において三倍に増えたばかりでなく、イラン人関連記事全体の半数以上を占めるまでになる。それまでは「不法滞在」や「不法就労」の「集中摘発」といった形でしかとり上げられなかったものが、彼らの起こした「犯罪」や「事件」の数々がメディアを飾るようになる。

なかでもイラン人の犯罪の舞台として盛んにとり上げられたのが、イラン人の最大の「たまり場」だった代々木公園の「リトル・テヘラン」である。1993年の「非合法関連」記事21件のうち10件と半数近くが、直接・間接に「リトル・テヘラン」に言及している。

1992年末の記事「東京のリトル・テヘラン　堂々麻薬密売のイラン・マフィア　原宿・代々木公園はアヘンや大麻、変造テレホンカードが取引される」（『AERA』1992.11.20）を皮切りに、1993年に入るとリトル・テヘランは「カオス」（＝混沌・無秩序）と形容され、潜入ルポの対象になり（『週刊プレイボーイ』1993.4.6,『宝島』1993.4.24）、ついには「日本人が近寄れない」（『週刊読売』1993.4.25）ような「コワイ」場所とされていく［町村,1999: 193-194］。

代々木公園（リトル・テヘラン）のなかのイラン人による犯罪やトラブルを強調する一連の記事が大衆雑誌を含めたマスメディアで盛んにとり上げられた後、代々木公園のイラン人に対する公園

を管理する東京都や治安当局による取り締まりは強化され、やがて「不法滞在者のい集」は「犯罪の温床」であるとして「排除」の対象になっていく［町村,1999:201］。その結果、いくつかの段階をへて代々木公園からイラン人は閉め出され、1993年の夏までに「リトル・テヘラン」は完全に姿を消すことになった。

だがこの「犯罪者」イメージの形成過程には、単にイラン人犯罪の増加とか、「リトル・テヘラン」での違法行為の存在といった「事実」をメディアが報道したという以上の、ある規則性、法則性が存在しているように思われる。分析枠組でいえば、第一象限に当たる主体×ネガティブな他者の「コワイ」イメージと、「非合法」イメージとが結びつくなかで、実際に具体的なイラン人の「排除」が行われ、「排除」が行われるとさらに「コワイ」イメージのネガティブさの度合が強まり、ますますイラン人は「コワイ」主体としてイメージされる。そうなると再び「非合法」イメージと結びついて「排除」が行われているのだ。第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけての流れでみると、第Ⅰ期に「コワイ」イメージと「非合法」イメージが結びつき、ビザ相互免除協定停止という「排除」が行われる。その直後にネガティブさを増したイラン人の「犯罪者」イメージが出現する。「犯罪者」イメージによる報道が続いた後、非合法な「不法就労者のい集」は「犯罪の温床」「治安問題」であるとして、代々木公園からの「排除」が行われていくことになる。

まずひとつには、「コワイ」イメージは「排除」への方向性を持つが、実際に「排除」が行われると、排除した他者のイメージがネガティブさを増して「もっとコワイ」ものになるという悪循環を抱えているようだ。またふたつめとして、「コワイ」イメージは確かに他者の主体を当該社会から「排除」する方向性を持つが、それだけでは実際の排除は行われず、「非合法」イメージによって「排除」が正当化されて、初めて実際の「排除」が行われる。逆にいえば、単に「非合法」イメージだけでは「排除」への方向づけは弱く、「コワイ」イメージによって明確な「排除」への方向性を与えられることになるとも言えそうである。

「リトル・テヘラン」消滅後、イラン人は日本社会のなかで目に見えない不可視な存在になっていき、またその数も帰国者が増えるにつれ減少していった(6)。ではイラン人イメージはその後どうなっていったのか。今までの議論からは、「排除」という技法の持つ悪循環が再び生じる可能性が高いと思われるが…。それでは第Ⅲ期の雑誌記事の分析に入りたいと思う。

（3）　第Ⅲ期　1993年９月～現在

先掲の表１にみるように、イラン人に関する記事は1994年でも未だ21件と多く、うち犯罪に触れた記事もなお10件と半数近くを占めている。「犯罪者」というイメージは、彼らの不可視化や減少によって、必ずしも消滅あるいは衰退したわけではない。第Ⅲ期におけるイラン人の犯罪を扱った雑誌記事の見出しには、第Ⅱ期のそれとは違うある特徴が認められる。それは以下のとおりである。

表４　第Ⅲ期(1993年９月～現在)におけるイラン人関連雑誌記事一覧

1993.	9.	徹底追跡　誰も書けなかった在日イラン人裏社会(『マルコポーロ』)
	9. 7	代々木公園乱闘事件、警察の取り締まりで分かった　日本社会はイラン人に冷たすぎるぞ(『週刊プレイボーイ』)
	9. 10	これがイラン人密売組織の「テレカ製造機」いまや40万円、変造カードは急増中(『ＦＯＣＵＳ』)
	9. 23	刑事政策学からの提言　代々木公園のイラン人締め出しなど何の役にも立たない！(『ＳＡＰＩＯ』)
	9. 23	外国人犯罪黒書　国際歓楽街新宿新事情「イラン人は麻薬を確実に裁き、ナイフの殺しがうまい！」不良・不法滞在者を探る日本のヤクザと中国・コロンビアマフィア(『ＳＡＰＩＯ』)
	9. 24	在日イラン人に笑顔が戻った夜　Persian Pop Live!　＊イランのベテラン女性歌手マハスティーの来日コンサート(『アサヒグラフ』)
	10. 15	＜グラビア＞ＷＡＮＴＥＤキャベツ畑の中のイラン人　＊農家で不法就労するイラン人たち(『週刊朝日』)
	10. 16	在日イラン人たちが怒りの大反論「日本人は何故我々を憎むのか」(『週刊現代』)
	11.	在日イラン人アンケート調査　あなたはキアロスタミを知っていますか？(『ＳＷＩＴＣＨ』)
	11. 9	イラン人排除活動の中で生きる日本のイラン人の現状とは！？新宿駅にたむろするイラン人の今(『宝島』)
	12. 5	イラン人の「サービス」で始まった高校生男女の大麻の宴　＊都内の高校生の男女25人が、自宅やキャンプ場などで、大麻パーティ(『週刊読売』)
	12. 22	日本に定住したいイラン人がたくさんいる(『ＶＩＥＳ』)
1994.	2. 16	イラン人＆インド人家探し同行取材　不動産巡りナント15軒連続シャットアウト「ガイジンお断り」現場実況ルポ(『ＳＰＡ！』)
	2. 16	日本一のカオスエリア　上野の「昼と夜」ドロップアウトした者たちの安住の地　上野公園口の一角が公認のテリトリー(『ＳＰＡ！』)
	3. 23	「イラン人」○×クイズ　これが出来れば、もれなくイラン人とお友達になれます(『ＳＰＡ！』)
	6. 8	ＧＡＩＪＩＮ－日本人に問い返される何をもって“日本人”と見るのか？　中国人→血のつながりイラン人→ペルシャからの古い歴史　イスラエル人→国籍そのもの(『ＳＰＡ！』)
	6. 10	新宿の夜に蠢くイラン人の「売買ゲーム」　＊偽造テレホンカードの材料となる使用済みテレカを売るホームレスたち(『ＦＲＩＤＡＹ』)
	6. 15	なぜボクらは戦争をしなければならなかったのか！？　ＳＰＡ！世代のイラン人戦争体験者が語る＊イラン・イラク戦争(『ＳＰＡ！』)
	6. 22	なぜ変造テレカを売るのはイラン人だけなんだ！？　ガイジンの間でもずっとナゾだった(『ＳＰＡ！』)
	6. 23	歌舞伎町マフィアの棲む街　殺しの相場一人50万円　＊歌舞伎町から３人の不良イラン人が日本人によって連れ去られた(『週刊文春』)
	6. 30	歌舞伎町マフィアの棲む街　売上金強奪・強姦のイラン人を追う(『週刊文春』)
	7. 7	歌舞伎町マフィアの棲む街　ある現役ヤクザの告白(『週刊文春』)
	7. 8	ヒゲのないイラン人の“仲間意識”(『ＦＲＩＤＡＹ』)
	7. 15	逮捕直後に死亡　「警察に殺された」と訴えるイラン人日本人妻の“証拠”(『ＦＲＩＤＡＹ』)
	7. 19	公園ルネッサンス企画　若妻、幼児、ワニ、死体。のぞきにゲイにイラン人…。ご近所の好奇心リゾート地帯　ぼくらは「公園探偵団」(『週刊プレイボーイ』)
	7. 21	歌舞伎町マフィアの棲む街　現役ヤクザの告白「イラン人を富士山中に運んで撃った」　＊イラン人がクラブで強盗、強姦した事件(『週刊文春』)
	7. 28	警視庁・代々木公園のイラン人排除は警察の大実験だった。(『週刊文春』)
	8.	在日イラン人顛末記　代々木公園を追われて一年。在日イラン人はどこで何をしていたのか(『ＡＣＲＯＳＳ』)
	9. 16	横行する警察・入管による外国人への暴行　イラン人変死事件から　＊出入国管理法、難民認定法違反容疑で拘留中のイラン人男性が死亡(『週刊金曜日』)
	10. 21	「日本人のおじさん」の悪知恵　イラン人を使って強盗重ねた店長　＊横浜市瀬谷区「ダイエー三つ橋店」現金強盗、他(『週刊朝日』)
	10. 23	イラン人集め現金強奪　「日本人オジサン」の知恵と経験　＊横浜市等で、イラン人を使ってスーパー連続現金強奪を働いた元スーパー店長(『週刊読売』)
	12. 23	ナセルたちの東京　報道されなかったイラン人群像(『アサヒグラフ』)
1995.	2.	このまま野放しでいいのか。日本の「闇社会」ガイジン犯罪白書②　テレカ偽造　サバイバルナイフで首を切断　＊不良外国人は日本のヤクザと組んで定着し始めた(『マルコポーロ』)
	8. 23	モハメッド・レザ・ラハバさん　コスモポリタン的な青春の糧を、日本で花開かせた、イラン人画家(『毎日グラフ・アミ』)
	9. 13	「ニッポン」にイッちゃった外国人　日本語で恋愛するアメリカ人と中国人のカップルから演歌マニアのイラン人、ＴＶの討論番組ファンのネパール人まで(『ＳＰＡ！』)
	10. 25	「在日イラン人」の素顔と本音　仕事・メシ・宗教・遊びから性欲の処理まで。僕たちの知らない{隣人たち}を徹底調査(『ＳＰＡ！』)

1996.	4. 19	高校生“客”も東京・大久保で“ドラッグ・マーケット”の「大麻密売現場」　＊表通りでチョコレート(大麻樹脂)やスピードの注文を取るイラン人(『ＦＲＩＤＡＹ』)
	5. 23	パワーショベルで寝込みを襲われたイラン人の不運　＊養豚業手伝いの男が殺人未遂で逮捕された(『週刊文春』)
	6. 25	“祝”法務大臣賞！刑務所製じゅうたんの日イ友好秘話　「第38回全国矯正展」で快挙…受刑イラン人のウデと日本の伝統工業が見事結びついた(『ＦＬＡＳＨ』)
	6. 27	日本人女性を“同棲”相手に…脱走イラン人の“凄腕”口説きテクニック　口伝えのナンパマニュアルを駆使！(『週刊宝石』)
	7. 12	首都圏を荒らす外国人怪盗団　潜入ルポ・第一弾 トラックごと店につっこむイラン人の荒ワザ(『週刊朝日』)
	8. 21	珍現象　日本に住むイラン人がアイデンティティ喪失の危機に直面している！？イラン人のシンボル、口髭が消え始めた(『宝島』)
	11. 8	イラン人が支配する「闇のドラッグ帝国」にスクープ潜入　第４弾　コギャルがシャブ漬けにされた！(『週刊ポスト』)
	11. 15	「闇のドラッグ帝国」潜入第２弾　捜査情報入手！イラン人売人はこうして密輸し、コギャルに売りさばく！(『週刊ポスト』)
1997.	1.	街は国境を越える13回　アートは社会を体現する。ペルシャ書道家、エスファンディアル・ラリの場合。　＊イランから来日し、日本人女性と結婚(『東京人』)
	1. 10	麻薬地帯ルポ　ニッポン・ドラッグ・パラダイス上　２億円荒稼ぎしたイラン人密売人が暴露　日本をヤク漬けにした悪魔の犯罪集団　ジャパディエ・レイ(『週刊朝日』)
	2. 12	“アジアの純真”イランの真実　戦争、革命、出稼ぎイラン人…イメージだけでとらえていた、中央アジア・イスラム国家の実態(『ＳＰＡ！』)
	2. 24	発信始めた在日外国人　成熟する日本の外国人メディア　＊週刊ビデオマガジンを作るイラン人、ハミッド・ゾノビ(『ＡＥＲＡ』)
	3 .5	あるイラン人がニッポンに滞在する理由とは？　＊ユセフ・ロトフィさん(『ＳＰＡ！』)
	4. 3	＜グラビア＞タクシー戦争の最終兵器？　イラン人運転手が街を行く　＊福岡在住のバッシャンプール・アキュバさん(『週刊文春』)
	4. 17	外国人に貢ぐ“亡国ギャル”の金主はオジサン　＊米兵や英語教師、不法滞在イラン人をむさぼり食う女子高生たち(『週刊実話』)
	5. 9	ハラールフーズ・ショップ「マハディ」　神奈川県川崎市　＊在日イラン人兄弟が経営する雑貨店(『アサヒグラフ』)
	6. 3	タクシードライバーはイラニアン　福岡市博多区(『アサヒグラフ』)
	8. 20	ＳＰＡ！版東京裏ウオーカー　旅行に出かけなくても気分は“外国”　＊イラン人の美容院、他(『ＳＰＡ！』)
	10. 31	現地報道で明らかになった“失態”　日本に入国拒否されたスエーデン人“怒りの告発”　＊スエーデン国籍のイラン人が罰金をとられ、国外退去(『ＦＲＩＤＡＹ』)
1998.	1. 16	斉木ババーク　イラン人と結婚？早く籍を抜け！(『週刊朝日』)
	3. 18	わずか半年で一億八千万円の売り上げ。イラン人マフィアの麻薬密売手口(『宝島』)
	9. 17	イラン人恋人・失恋自殺騒ぎ・ストーカー同僚…　斉藤陽子「自分史エッセイ」に書かれなかった「３人の男過去！」(『アサヒ芸能』)
1999.	6. 3	史上最高量のＬＳＤ押収で浮かび上がったイラン人密売組織の陰　＊東京(『週刊実話』)
	6. 23	国民の本音は「米国と関係改善したい」が、ネックは保守派だ　＊イランとアメリカの関係、在日イラン人について(『ＳＡＰＩＯ』)
	6. 24	電波少年的フットワークの軽さとは！？　＊イラン人ＡＤ募集、他(『アサヒ芸能』)

（資料）［大宅壮一文庫，2000］より筆者作成。検索語＝イラン人。
（注）表からは個別の刑事事件報道は除外した。除外した件数は、93年１件（原宿スタイリスト殺人１件）、94年１件（原宿スタイリスト殺人１件）、96年13件（集団脱獄事件13件）。

イラン人の犯罪が「裏」（『マルコポーロ』1993.9)、「闇」（『マルコポーロ』1995.2,『週刊ポスト』1996.11.8 & 1996.11.15）、「黒」（『ＳＡＰＩＯ』1993.9.23）、「夜」（『ＦＲＩＤＡＹ』1994.6.10）、「陰」（『週刊実話』1999.6.3））といった、「見えないこと」＝不可視性と同時に「罪」や「悪」、「非合法」性をも同時に象徴するような記号により、しばしば表現されるようになった点である。

これらの記号が用いられた最初の記事が、イラン人の不可視化のきっかけとなった代々木公園からの排除＝「リトル・テヘラン」の消滅の直後に掲載されたこと（「徹底追跡　誰も書けなかった在日イラン人裏社会」『マルコポーロ』1993.9）は、イラン人たちが「排除」によって見えない存在＝不可視になったことが、「犯罪者」イメージを変容させていったことを示唆している。

では変容した「犯罪者」イメージのなかで、イラン人たちとその「犯罪」は如何に語られたのか。まず日本人から目の届かない所で、イラン人の犯罪の凶悪化（変造テレホンカードや麻薬の密売ばかりでなく、恐喝、強盗や強姦、殺人も）が進んでいるとのイメージが強調される（「イラン人は麻薬を確実に裁き、ナイフの殺しがうまい！」（『ＳＡＰＩＯ』1993.9）、「売上金強奪・強姦のイラン人を追う」（『週刊文春』1994.6.30）、「テレカ偽造　サバイバルナイフで首を切断」（『マルコポーロ』1995.2.）など）。また犯罪の集団化も、「イラン人マフィア」としてイメージされる（例えば、『週刊文春』1994.6.23,『宝島』1998.3.18,『週刊実話』1999.6.3など）。また彼らは日常生活を侵犯し脅かす存在（例えば「薬物汚染の元凶」）としてもイメージされる（「コギャルがシャブ漬けにされた！」『週刊ポスト』1996.11.8,「日本をヤク漬けにした悪魔の犯罪集団」『週刊朝日』1997.1.10など）。

しかもこれらのイメージは執拗に、時に連載記事という形をとって、繰り返し語られる（例えば、「歌舞伎町マフィアの棲む街」『週刊文春』1994.6.23,6.30,7.7,7.21、「イラン人が支配する「闇のドラッグ帝国」にスクープ潜入」『週刊ポスト』1996.11.8,11.15など）。第Ⅲ期の雑誌記事における犯罪報道において、イラン人は単に法律を犯した「法律違反者」ではなく、犯罪と結びつけられる「非行性」を持った「不良」イラン人（『ＳＡＰＩＯ』1993.9.23,『週刊文春』1994.6.23,『マルコポーロ』1995. 2.）として捉えられていく[(7)]。

ここまでの分析から、公的空間からの「排除」（代々木公園の「リトル・テヘラン」の閉鎖）で幕を開けた第Ⅲ期の雑誌記事においても、やはり「排除」の技法が孕む悪循環が認められる。第Ⅰ期におけるイラン人の「コマッタ」「コワイ」イメージは、ビザ相互免除協定の停止という「排除」を経て、第Ⅱ期において「犯罪者」イメージとして「コワサ」を増したものが、さらなる「排除」によって、第Ⅲ期においてはもっと「コワイ」存在としての「不良」イラン人イメージになっていったといえるだろう。

ではなぜこの悪循環は起こるのか。奥村はその悪循環メカニズムについて、以下のように説明する。「排除」という技法は、「必ず成功しないで、ある悪循環をたどる。ある他者が「コワイ」。だから彼との接触を断つ。そうすると彼が「どのような人」かはさらにわからなくなり、なにをされるかもっと予測不可能になる。「排除」によって、他者はむしろ私の制御を越えた「主体」である度合い（「コワサ」）を増していくのだ。だからさらに接触ができなくなり、そうすると彼らはさらに「コワク」なり、だから…」［奥村,1998:109］。

第Ⅲ期における「不良」イラン人イメージの形成もまた、「排除」と「コワイ」イメージの増幅の連鎖の果てに生み出されたものだった。そして「不良外国人」としてのイラン人イメージは、例えば「イラン人密売組織の陰」（『週刊実話』1999.6.3）といった見出しにみるように、なお現在も続いているのである。

Ⅳ　結語と課題

本稿では、1990年代の日本の大衆雑誌のなかに現れたイラン人イメージを、奥村による異質な他者のイメージおよび異質性への対処の技法についての分析枠組を用いて分析した。またイラン人イメージの変容を、三つの時期に区分して分析した。その結果、明らかになった点は以下のとおりである。

まず第Ⅰ期においては、イラン人に対する複数のイメージが現れていた。第三象限（客体×ポジティブ）に該当する「出稼ぎ労働者」としての「カワイソウ」イメージ、第一象限（主体×ネガティブ）に該当する「コマッタ」「コワイ」イメージ、第二象限（客体×ネガティブ）に該当する「キタナイ」「クサイ」イメージが雑誌記事中に見出されるが、これらは順に「同情」（第三象限）、「排除」（第一象限）、「差別」（第二象限）という異質性への対処の「技法」に向かう可能性がある。また、もはや「異質性」への対象の技法とはいえないが、残りの第四象限（主体×ポジティブ）に当たる「同質化」「同化」という技法に向かうイメージの萌芽も見いだせた。さらに本稿では雑誌記事のなかに、「カワイソウ」イメージと同じく第三象限（客体×ポジティブ）に該当するがそれとは異なる、「メズラシイ」「カワッテル」イメージを見出した。このイメージは異質な他者を、いわば差異の記号として“商品化”し、「私」がそれを“消費”するという「消費」「商品化」という技法への方向性を示唆するものである。

第Ⅱ期、第Ⅲ期の雑誌記事の分析では、以上の異質性への対処の技法のうちで、実際に技法として最も実行されたと思われる「排除」の結果、どのようにイラン人イメージ、特に「コマッタ」「コワイ」外国人イメージが変容していったのか明らかになった。そこでは「排除」の技法が孕む悪循環のメカニズムによって、イラン人イメージが変容していったのである。すなわち他者が「コワイ」ので「排除」すると、より見えずわからなくなった他者はもっと「コワク」なり、もっと「コワイ」のでさらに「排除」すると、同じ理由でさらに「コワク」なる。このような悪循環プロセスが、「コマッタ」「コワイ」イメージ→ビザ相互免除協定停止（排除）→「犯罪者」（もっと「コワイ」）イメージ→リトルテヘランの閉鎖（排除）→「不良外国人」（もっともっと「コワイ」）イメージという変容の背景にあったのだ。

また当初は単なる「不法滞在」「不法就労」という出入国管理法違反以上の意味を当初は持たなかったイラン人の「非合法」イメージは、その後「排除」への方向性を持つイラン人イメージと結びつくことによって、実際の「排除」の実行に対し、法的に（あるいは政治的、社会的にも）正当なイメージを与えることになったといえよう。

最後に残された課題について、三点ほど列挙したい。第一に、本稿ではまずは大衆雑誌のみを分析したが、印刷メディアに限っても他に新聞記事も分析対象に加えてみる必要があろう。第二に、本稿では「コワイ」イメージと「排除」以外の技法については、あまり詳細に論じていない。他のイメージや技法、特に新たに析出された「消費」「商品化」については、あらためて論じたい。第

三に、奥村の分析枠組の第四象限に該当する、「同質化」「同化」とは別の、他者の異質性を維持したまま他者の主体とポジティブにつき合う技法は、本稿の分析対象うちには未だ見いだせない。もしそれがありうるならば、その技法はよく言われるように「共生」とでも呼びうるものだろうか。また他者と私は、主体あるいは客体として、どのように現れあるいは現れないのだろうか(8)。大変に重要な問いではあるが、紙幅が尽きた今は、今後の課題とする他はない。

＜注＞

（１）　奥村の分析枠組は最初、研究報告書［町村,1990］の第２章に掲載されたが、［奥村,1998：ch.3］はそれに加筆修正を行ったものである。

（２）　「排除」と「差別」は、異なる技法である。前者は同じ社会から他者を「排除」するが、後者は同じ社会のなかで他者を「差別」する技法である［奥村,1998：110］。

（３）　奥村は他者の異質性を保持したままで、第四象限にとどまるような技法の可能性について示唆しているが、ここでは議論しない。

（４）　例えば、［小松,1985：11-14］を参照。

（５）　その意味で、1992年４月頃の上野のイラン人を扱った雑誌記事のなかで、唯一イラン人をある程度はっきり主体として描いていたのは、『サンデー毎日』（1992.4.12）だけのように思われる。見出し中のイラン人たちの口調の強さ（「俺たちは花見どころじゃないんだ！」）に注意。

（６）　法務省の発表によると、イラン人の超過滞在者数は1992年５月の約４万人を最高に、減少に転じ、一年後の93年５月時点では三万人を割り、さらに一年後の94年５月では、ピーク時の半数の約二万人まで減少している。その後も減少傾向は続き、現在は一万人を割り込んでいる。法務省入国管理局「本邦における不法残留者数について（平成１２年１月１日現在）」，http://www.moj.go.jp/ 参照。

（７）　「法律違反者」と「非行者」、「非行性」の概念は、フーコー（Foucault,M.）『監獄の誕生』の第四部第二章「違法行為と非行性」を参照［Foucault,1975=1977：257-293］。内田の要約によれば、「法律違反者」には犯罪を犯したこと以上の意味も以下の意味もないが、「非行者」はその本能、衝動、傾向、性格などの複合体として自分の犯罪と結びつけられる。その犯罪に結びつけられる危険で、病的で、邪悪で、有害な性質が「非行性」である［内田，1990：170-171］。

なおフーコーは「非行者」とマスメディアの関係について以下のように述べており、「不良外国人」イメージを考えるうえで興味深い。「探偵〔警察〕文学と結びついた三面記事が一世紀以上のあいだ生みだしつづけたのは過度に多数の《犯罪物語》であって、そこではとりわけ非行性はきわめて卑近なものとしてと同時にまったく無縁なものとして、日常生活に永久に脅威を与えるものとして、だがその起源や動機や日常性でしかも異国的な姿をみせるその環境などの点では迂遠なものとして現われる」［Foucault,1975=1977:283］。

（8）　クリステヴァと奥村が、この問いに対し同様の示唆をしている［Kristeva,1988=1990:222］［奥村,1998：121］。両者とも、一律に自己を主体に他者を客体に、あるいは逆に自己を客体に他者を主体に割り振るのでない、自己と他者がともに主体でも客体でもありうる、どちらが主体か客体かわからない状態をイメージしている。

＜参考文献＞

内田隆三 1990『ミシェル・フーコー－主体の系譜学－』（講談社現代新書）講談社。

大宅壮一文庫編 2000『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録1988-1999 件名編』（CD-ROM版）紀伊国屋書店。

奥村　隆編 1997『社会学になにができるか』八千代出版。

奥村　隆 1998『他者といる技法－コミュニケーションの社会学－』日本評論社。

倉　真一 1995「景気後退下の在日イラン人－出身階級・生活機会およびその獲得戦略を中心に－」『年報社会学論集』8，関東社会学会→1996 駒井洋編『日本のエスニック社会』明石書店：229-252。

小松和彦 1985『異人論－民俗社会の心性－』青土社。

町村敬志編 1990『「国際化」の風景－メディアからみた日本社会の変容－』「国際化とメディア」研究会（筑波大学社会科学系）。

町村敬志 1999「グローバル化と都市－イラン人はなぜ「たまり場」を作ったのか－」『講座社会学４都市』東京大学出版会：159-211。

三隅譲二 1993「外国人レイプ魔の噂の深層」『わかりたいあなたのための社会学・入門』（別冊宝島176）宝島社：213-218。

森下伸也ほか 1998『［パワーアップ版］パラドックスの社会学』新曜社。

山崎喜比古ほか 1992『上野の街とイラン人－摩擦と共生－』東京大学医学部保健社会学教室。

Foucault, Mitchel 1975 *Surveiller et punir:Naissance de la Prison*, Gallimard. = 1977 田村俶訳『監獄の誕生－監視と処罰－』新潮社。

Kristeva, Julia 1988 *Etrangers à nous-mêmes*, éd. Fayard = 1990 池田和子訳『外国人－我らの内なるもの－』法政大学出版局。

Mills,Charles Wright 1963 *Power, politics, and people : the collected essays of C. Wright Mills*,Oxford University Press. = 1971 青井和夫・本間康平監訳『権力・民衆・政治』みすず書房。